

CHATEAUBRIAND の詩集 TABLEAUX DE LA NATURE について

佐藤弓葛

Chateaubriand の生涯の親友で、文学上の最もよき忠告者 Fontanes (Louis, marquis de) (1757-1821: 11 歳年上) は Chateaubriand が韻文をすてたことをたいへん残念がった。

Mémoires d'outre-tombe にもしるされているように René は青春時代には韻文を作った。しかし、それは彼自身が言っているようにあくまでも人に見せるためのものではなく、「Muses は彼にとっては家の守護神であった」。もちろんそうたくさんは作っていない。(1831 年 63 歳で発表した劇作 *Moïse* (韻文劇) は除外する。) 姉の Lucile とコンブールの館の森を散歩している時、René が目を輝かせ、汚れなき自然に抱かれる人間の孤独の心地よさを語るのを姉が聞いて «Tu devrais peindre tout cela» 「そうしたことを皆描かねば駄目よ。」¹⁾ と言った。その言葉にうたれて、たちまち René の心の中に Muse が現われたと言っている所からしても、この頃から彼が韻文で作詩をはじめたのは事実とみて差支えなからう。

しかも彼の最初の詩集 (1784 年 15 歳から、1789 年 20 歳のもの) はすべて自然に対する愛を詠んだものである。

それは牧歌 (Idylles) と言ってよいものであるが、いわゆる彼自身が言っているように「羊も羊飼も殆んど出てこない」田園抒情詩である。Chateaubriand はそれに *Tableaux de la Nature* と言うタイトルをつけ 1828 年 (60 歳) 全集 Edition Ladvocat の第 22 巻に挿入して発表している。

韻文を作った時代から 40 年を経ているので、作品に手を入れたかどうかはさだかでないが、Chateaubriand 自身は序文で «Je n'ai rien ou presque rien changé à ces vers.» 「私は全く或は殆んど全くこれらの韻文を変えなかった。」と述べている。しかし序詩の *Invocation* (祈願) にはじまり最後の *Les adieux* (別れの言葉) で終る 10 篇の詩の配列は明らかに作為的であり、また

序詩と最後の詩はその作詩時期に大いに疑惑がもたれる。

しかし、*Tableaux de la Nature* と言う表題は奇しくも 1797 年、彼がロンドンで発表した「革命試論」*Essai sur les révolutions* の第 54 章の注と最終章第 57 章の注に出ているので、Chateaubriand が青春時代にすでに自然描写には、そうした題名がふさわしいと思っていたことは確かであると言えよう。問題はその「革命試論」に出ている 2ヶ所の *mes Tableaux de la Nature* が如何なるものかを調べる必要があるであろう。

はじめの第 54 章では René がサン・マローからアメリカに出帆し、乗船した船 *Saint-Pierre* 号が途中で島に停泊した時、彼が船中で知り合ったイギリスの青年 Francis Tullock と共に食事の後、Ossian のエピソードの中に出てくる不幸な有名人を記念して建てて遊んだ四つの石と言う箇所注として次のように書かれている。

«Il était tiré de *mes Tableaux de la Nature*, que quelques gens de lettres ont connus, et qui ont péri comme je le rapporte ci-après.»

(ロンドン版 p. 640 の注：全集 *Ladvoat* 版では第 II 巻、第 54 章)

従って、この *mes Tableaux de la Nature* は Ossian 流のものとのあるので 10 篇からなるこの詩集を指しているものとは考えられない。

最終章の注にある *Tableaux de la Nature* は「アメリカの未開人のもとの夜」*Nuit chez les sauvages de l'Amérique* の中に出て来るのでナッチェス族の風景を指している。René の心に忘れ得ぬ印象を与えたナイアガラの瀑布の景観である。注には次のように描かれている。

«Tout ce qui suit, à quelques additions près, est tiré du manuscrit de ces voyages, qui a péri avec plusieurs autres ouvrages commencés, tel que *les Tableaux de la Nature*, l'histoire d'une Nation Sauvage du Canada, sorte de Roman, dont le cadre totalement neuf, et les peintures naturelles étrangères à notre climat, auraient pu mériter l'indulgence du lecteur.»

(ロンドン版 p. 672 の注：全集 *Ladvoat* 版第 II 巻、p. 418 の注)

上の注から見れば、これは明らかにアメリカの自然を指している。それに Chateaubriand 自身も 1826 年版(全集第 II 巻)の N. Ed. でこの注にさらに新しい注をつけ「これはナッチェス族に関するものである」«Il s'agit ici des

Natchez》と言っている。従ってこれも 10 篇からなる韻文の詩集を指していないことは明らかである。

Tableaux de la Nature が失われた詩集であるとするならば、1828 年に発表した序文の中でも作者は喜んで、失われたこれらの詩が再び発見されたことに触れるのが当然であろうに一言もそれには触れてない所からしても *Essai sur les révolutions* に出て来る 2 度の *mes Tableaux de la Nature* は明らかに 10 篇からなるこの韻文でないことは理解出来よう。

さて、*Essai sur les révolutions* の第 2 部第 23 章の注で、やはりアメリカの自然の美しさに触れ、感激して口をきかなくなる箇所に表題的名称ではないが次の一文がある。

«J'ai toujours remarqué qu'à l'aspect d'un beau tableau de la nature on tombe involontairement dans le silence.»

また Chateaubriand が 1795 年に発表した一書翰 *Lettre sur l'art du dessin dans les paysages* の中にも *les tableaux de la nature*²⁾ という言葉がある。

さらに彼がイギリスから帰国し、Fontanes が編纂していた *Mercur de France* に協力して 1802 年に発表した *Young 論*³⁾ の中にも *tableaux de la nature* という言葉が見出せる。

しかし、これらの *tableaux de la nature* は作品名としてではなく、文章の中の言葉として記されているから作品でないことは明白である。

こうして見ると *Les Natchez* (1826 年) を発表した後、青年時代の韻文を集め発表するに当って Chateaubriand はその内容にふさわしい表題として以前から脳裡をかすめていた *Tableaux de la Nature* を選び出したとみるのが最も妥当ではなからうか。

Mémoires d'outre-tombe (1849 年) の第 1 部第 3 巻第 7 章にある *Tableaux de la Nature* という言葉は 1826 年の *Mémoires de ma vie* のその箇所には «la petite pièce sur la forêt: Forêt silencieuse» とあるだけで *Tableaux de la Nature* とは書かれていないのであるから、その後付加したことは明らかであり問題ではないが、1826 年の *Mémoires de ma vie* の中に作品名として *Tableaux de la Nature* が出て来ないと言うことは、やはり *Essai sur les révolutions* の *Mes Tableaux de la Nature* とはもちろんちがうことを意味するし、

また韻文の表題が *Tableaux de la Nature* として選ばれたのも 1826 年以降のことと見るのが至当ではなかろうか。

* * *

さて 10 篇からなる韻文は下記の通りである。

Préface 「序文」

1. *Invocation* 「祈願」
2. *La Forêt* 「森」
3. *Le Soir, au bord de la Mer* 「夕べ、海のほとりにて」
4. *Le Soir, dans une vallée* 「夕べ、ある谷間にて」
5. *Nuit de printemps* 「春の夜」
6. *Nuit d'automne* 「秋の夜」
7. *Le printemps, l'été et l'hiver* 「春、夏、冬」
8. *La mer* 「海」
9. *L'Amour de la campagne* 「田園への愛」
10. *Les adieux* 「別離」

それでは 10 篇のうち確実に青春時代の作品とみられるものを調べてみよう。

まず、最初に挙げられるのは 1790 年に文芸雑誌 *Almanach des Muses* に発表された第 9 の風景すなわち *L'Amour de la campagne* 「田園への愛」である。それから 1802 年 Fontanes によって一詩人の 16 歳の時の詩として *Mercur de France* に掲載された第 2 のタブロー *La Forêt* 「森」で、この 2 篇については後に詳細に述べるが、とにかく内容に多少の相違があるにせよ、Chateaubriand の若い時の作であることには疑問の余地がない。

第 6 の詩 *Nuit d'Automne* 「秋の夜」も前半 35 行目までは 1802 年に *Mercur de France* に発表されているから確かと言える。しかし 36 行目から最後の 69 行目までの追加分はいつの頃の作詩だか明らかでない。

その他のものもいつの作だか正確なことは解らないが第 4 の詩 *Le Soir, dans une vallée* 「谷間の夕べ」には Ossian 的調子がみられるし、また Chevalier de Parny の *élégies* の影響も多少感じられる様に思えるから 20 代までの作かも知れない。

第 3 の詩 *Le Soir, au bord de la mer* 「夕べ、海のほとりにて」については Jules Janin が 15 歳⁴⁾の時の作であるとして *Essai sur la vie et les ouvrages de M. Chateaubriand* 「シャトブリアン氏の生涯と作品論」(1838 年)

に全文をかかっているが、その理由は示されていない。しかし、「*La sanctuaire où le Dieu s'introduit*」と言う行をみると、わざわざ *le Dieu* としてあり、如何にも大革命前のフランスの空気が感じられるように思えないこともないし、また Chateaubriand 自身ギリシャ文学に憧れていたので *le Dieu* が出現したのかも知れないが、いずれにしても René の青年時代の香りの強さがみられる。

また第8の詩 *La Mer* 「海」の書出し「*Des vastes mers tableau philosophique*」にも、如何にも18世紀末の表現が強く現われている。

Chateaubriand は *Tableaux de la Nature* の序文で当時の流行にならって自分の詩にも *inversion* 「語の倒置」が多いと述べている所からみれば第5の詩も青春時代の作とみて差支えないかも知れない。それにこの詩は極めて凡庸なところからも案外早い時の作ではなかろうか。

こうして見ると、配列の年代順の是非はともかく、第1と第10の詩を除けば Chateaubriand が序文で言っているように「殆んど書き変えなかった」と認めることも、詩の形式や内容から検討すれば余りはずれていないかも知れない。

しかし最後の第10の「別離」には多分に疑惑がもたれる。

この詩の出だしは

「時が私を呼ぶ、これらの詩歌を終らねばならない
おお谷よ、お前を去るに当って、私はお前に挨拶する」

と言って別れを告げている。

これが1790年代とすれば1797年すなわち詩人が28歳の時に Gray の詩をまねて「田舎の墓地」*Les tombeaux champêtres* がロンドンの Peltier 氏の新聞 *Journal de Paris* に発表されているので、Chateaubriand は風景画の詩との別離の後にも韻文を書いていることになるから *Les adieux* は意味をなさなくなる。

しかもこの「田舎の墓地」は Sainte-Beuve も指摘しているごとく Chateaubriand の韻文としては多分に詩人として才能のみられる作品であるから第10の *Les adieux* は詩の体裁を整えるために後から書かれて付けたされたものと見る方がむしろ正しいのではなかろうか、それに最後のその詩には彼がわざわざ序文で述べている *inversion* も余り見られないし、またどことなく散文を韻文に書変えた感じさえするように私には思えるのである。

それでは確実に発表された作品についてのみ深く掘り下げてみよう。

* * *

L'Amour de la campagne

「田園への愛」

Chateaubriand の生涯で最初に公にされた作品がこの「田園への愛」と言う詩である。

1790年の *Almanach des Muses* 「詩神年鑑」と言う文芸雑誌の205頁に掲載された。ちょうど Pons de Verdun⁵⁾ と Hoffman⁶⁾ の詩の間に置かれている。作詩者は Chevalier de C(ombourg) となっている。時に彼は21歳である。

René が Combourg の館で姉の Lucile と夢想に耽り青春を無為にすごしているのを気づかった父親は彼のために Navarre 連隊の歩兵将校の肩書を得て、それを彼に与え1786年8月(17歳) Combourg より連隊のある Cambrai に向け発させた。途中 René は Paris により兄姉にあい、それから任地に向ったが貴族連隊は暇なので、Paris にいる時が多く、その間に姉 Julie すなわち M^{me} Comtesse de Farcy が開いていた社交界で Paris の文人達と知り合った。もちろん Chevalier de Combourg は田舎出の青年であったからもっぱら聞き役であったが、この間に文学的知識を大いに貯えた。ギリシャ熱にとらわれ毎日 *Odyssée* と *Cropédia* を訳すのが彼の日課であったのもこの時期である。彼がつき合を得た主なる文人は Delisle de Sales⁷⁾, Flins des Oliviers⁸⁾, Chevalier de Parny⁹⁾, Ginguené¹⁰⁾, Le Brun¹¹⁾, Chamfort¹²⁾, La Harpe¹³⁾, Fontanes¹⁴⁾, Panat¹⁵⁾ 等である。

Panat は当時の René を次のように評している。「Il est plein de génie, quoique à demi fou.」 「少し気狂じみているが、才能は抜群だ。」

この短い言葉には Chateaubriand の将来を何にか予言しているようなひびきが聞かれる。

さて、その頃次第に政情悪化し、やがて大革命を迎える(1789年7月)。Chateaubriand は人民の激しさと暴力に怒りをおぼえる。一方 Fontanes や Flins des Oliviers は新聞 *Modérateur* に協力する。^{モゼラトゥール} 中庸(中道)すなわち幸福としての自由は両極端の間にあると主張する運動である(1789年10月より1790年4月初まで)。

Chevalier たる青年 Chateaubriand は Delisle de Sales の保護のもとに *L'Amour de la campagne* を発表する。最初の発表だけにその成功にかけた René の心配と希望は *Ladvoocat* 版の Chateaubriand 全集第 22 巻の序文を見れば容易に察せられる。

«Que faisiez-vous donc?—Je m'ennuyais.—Ainsi vous ne vous sentiez aucune ambition?—Si fait: à force d'intrigues et de soucis, je parvins, par la protection de Delisle de Sales, à la gloire de faire insérer dans l'Almanach des Muses une idylle (*L'Amour de la campagne*) dont l'apparition me pensa faire mourir de crainte et d'espérance.»

「では君は何をしていたのか、——退屈していた。——それでは何の野心もなかったのかね。——いや、あった。苦勞に苦勞をかさねやつと Delisle de Sales の保護の下に、「詩神年鑑」に「田園への愛」と言う牧歌を一つ入れさせて貰うことに成功したが、出版に際し、心配と希望でわたしは生きている気持もない思いだった。」

このようにして René の処女作「田園への愛」は 1826 年に上述の全集の第 22 巻 *Mélanges et Poésies* の中の *Tableaux de la Nature* の第 9 の詩として再び収められている。

全集に出ている上述の引用文と *Mémoires d'outre-tombe* の第 1 部第 4 巻第 9 章 (Pléiade 版 T. 1, p. 134) に出ている文章との相違は直接作品に関係はないが、晩年の Chateaubriand の Delisle de Sales に対する態度がすかして見え興味をそそる。

«Que faisiez-vous donc?—Je m'ennuyais.—Ainsi vous ne vous sentiez aucune ambition?—Si fait: à force d'intrigues et de soucis, j'arrivai à la gloire d'insérer dans «l'Almanach des Muses» une idylle dont l'apparition me pensa tuer d'espérance et de crainte.»

このように Delisle de Sales の名も、またその保護を受けたと言う言葉もきれいに削られている。また題名 *L'Amour de la campagne* もただ une idylle とだけしか記されていない。

二つの引用文の最後の行では «me pensa faire mourir» が «me pensa tuer» となっていて三つの動詞を列べるより二つの方が簡潔であり、しかも tuerの方が感情的に刺げきが強しい、最後の espérance と crainte の倒置にも効果をねらっている作家の配慮がみられる。

さて、1790 年に発表された詩とこの第 9 のものとの相違は文章には見られな

いが句読点において6ヶ所の違いがある。しかしそれらの相違は作家の意図によるものか、印刷屋がそうしたのかは明らかでない。いずれにしても Chateaubriand の最初に出版された作品であるだけに、詩のよしあしはとにかくとして極めて貴重なものである。まず全文を引用して訳してみよう。

L'Amour de la campagne

Que de ces prés l'émail plaît à mon cœur !
 Que de ces bois l'ombrage m'intéresse !
 Quand je quittai cette onde enchanteresse,
 L'hiver régnoit dans toute sa fureur.

Et cependant mes yeux demandoient ce rivage ;
 Et cependant d'ennuis, de chagrins dévoré,
 Au milieu des palais, d'hommes froids entouré,
 Je regrettois partout mes amis du village.
 Mais le printemps me rend mes champs et mes beaux jours.
 Vous m'allez voir encore, ô verdoyantes plaines !
 Assis nonchalamment auprès de vos fontaines,
 Un Tibulle à la main, me nourrissant d'amours.
 Fleuve de ces vallons, là, suivant tes détours,
 J'irai seul et content gravir ce mont paisible ;
 Souvent tu me verras, inquiet et sensible,
 Arrêté sur tes bords en regardant ton cours.

J'y veux terminer ma carrière ;
 Rentré dans la nuit des tombeaux,
 Mon ombre, encore tranquille et solitaire,
 Dans les forêts cherchera le repos.

Au séjour des grandeurs mon nom mourra sans gloire,
 Mais il vivra longtemps sous les toits de roseaux ;
 Mais d'âge en âge, en gardant leurs troupeaux,
 Des bergers attendris feront ma courte histoire :

“ Notre ami, diront-ils, naquit sous ce berceau ;
 “ Il commença sa vie à l'ombre de ces chênes ;
 “ Il la passa couché près de cette eau,
 “ Et sous les fleurs sa tombe est dans ces plaines.”

(Neuvième Tableau.)

田園への愛

なんと、この牧場の色とりどりの花はわたしの心を楽しませてくれることよ。
 なんと、この森の木かげはわたしに気に入ることよ。
 わたしがこのうっとりする水の流れと別れた時
 冬はまさに厳しくたけなわであった。

だが、わたしの目はあの川岸を求めていた。
 だが、うかめ気持と心の激しい苦しみを抱いて
 館のさ中で、心つめたき人々にかこまれ、
 わたしは到る所に里の友等をなつかしんでいた。
 しかし春はわたしに畑と青春を返してくれる
 オーみどりの野よ、汝等は再びわたしに会いに来よう
 汝等の泉のほとりにむざうさに坐ったわたしに、
 手にテビュルス一冊を持ったわたしに愛をはぐくみながら
 あの谷間の流れ、そこで汝のうねりを辿り
 わたしは独り楽しく、あの静かな山をよじ登りに行く。
 汝はよくわたしを見かけるであろう、汝のほとりで流れを眺めながら足をとどめ
 る不安な感じ易いわたしを。

わたしはここでわたしの生涯を終えたい。
 墓地の闇に戻った
 なお静かで、孤独なわたしの亡霊は
 森の中で憩いを求めるであろう。

数々の偉大さのある世に、わたしの名は栄光もなく死ぬであろう。
 しかし、それは葦の屋根のもとに長く生きよう
 だが、年がたつにつれ、羊の群を見守りながら
 やさしい羊飼達はわたしの短い人生を物語るであろう。

「我等の友は、と彼等は言をう。このようらんのもとに生れ
 この柏の木かげで暮らしはじめ、
 この水のほとりで眠り人生をすごした。
 そして花にうもれた彼の墓はこの野辺にある。」

この韻文は4行12行4行4行4行計28行からなり、最初の4行は10綴、次の12行は12綴 (alexandrin)、次の4行の初め2行は8綴、後の2行は10綴、第3番目の4行はまた alexandrin で最後の4行は初めの2行が alexandrin で後の2行が10綴である。

また押韻は最初の4行は abba=mffm で次の12行も cddc, effe, gh

hg=fmmf, mffm, mffm で抱擁韻 (rimes embrassées) であるが、次の4行は abab=fmfm の交韻 (rimes croisées) となり第3番目の4行はまた rimes embrassées に戻り、最後はまた rimes croisées になっている。従って rimes mêlées と言うことになる。

Chateaubriand が全集第22巻の序文でも言っているごとく当時流行の詩人 Dorat¹⁶⁾ (Claude-Joseph, 1734-1780) の影響を受けた詩の形式と言えよう。くだけた時は10綴を好み押韻も自由で8綴も入れるし、alexandrin でも書くと言う点がみられるからである。

また最初の2行は «Que de ces près l'émail..., Que de ces bois l'ombrage...» ではじまり、次の12行のはじまりも «Et cependant..., Et cependant...» となり、第3番目の4行の2行目と3行目は «Mais..., Mais...» と列べているが、美しくもないし、上手な並列とはお世辞にも言えない。如何にも初心者の気負いと言う感じが現れているように思える。最初の2行の inversions もまずさが目立つ。2番目の4行詩に見られる «Rentré..., Mon ombre...» にも文法的に多少無理があるし、«Et cependant d'ennui» や «Commença sa vie» の配列も余り感心出来ない。

詩の内容は表題が示すごとく、若き詩人が心をよせる田園への哀愁が読まれている。Paris に出て来て、文人の社交界に出入りしても、自分の心にまっ先に感じられる状景は Bretagne の静かな森に育った、もの悲しい自分の姿である。

Chateaubriand が最も好み、生涯彼につきまとう ennui という言葉がこの最初の作品から用いられていることも意味深いことである。

作品 *René* に見られる ennui も、*Génie du Christianisme* に描かれている *Du vague des passions* (情念の不安定) も、*Mémoires d'outre-tombe* の巻頭にある «Sicut nubes... quasi naves... Velut umbra» 「雲の如... 船の如... 風の如」も、さらには最後の74歳の時の作品 *Vie de Rancé* に折込んだ René-Rancé の ennui も、その源に遡ればすべてこの処女作の詩に読まれた ennui をはじめとすることを知れば、Chateaubriand の血に流れている invisible な特質に触れる思いがする。それはやがて «Mal de René» となり «Mal de Siècle» と言う大きな流れに発展する。

手に一冊の *Tibulle* を持って谷間の流れに沿い、野や山をさまよう Chevalier Chateaubriand。これこそ詩人を憧れる若者の姿を代表しているのである。

Tibulle (Aulus Albius Tibullus) (西紀前 54 年—西紀 18 年頃) が 18 世紀後半大いに流行し、1763 年には Lebrun-Pindare は Académie de la Rochelle に *un discours sur Tibulle* を送り、Nivernais は *Tibulle* のために Ovide (Publius Ovidius Naso) (西紀前 43 年—西紀 17 年) をやつつけている。1777 年に M. de Longchamps によって *Tibulle* の訳が出ている。

Mémoires d'outre-tombe の第 1 部第 2 巻第 3 章に «Je dérobai un *Tibulle*» とあり、Chateaubriand が 12,3 歳の時ギリシャ・ラテンの詩人の作品に夢中になって隠し読みしていたことが書かれている。また若き日の René が夢中で暗記した先輩の詩人 Chevalier de Parny は死の床ついていた Voltaire に «Cher *Tibulle*» と呼ばれ、Le Brun からは «*Demi Tibulle*» と呼ばれていた。

従って「手に *Tibulle* 一冊を」と言う言葉はこの詩の発表時期から察すると案外フランスの *Tibulle* すなわち Chevalier de Parny の詩集かも知れないと見るのもそう突飛な思いつきではないのでなからうか? Chateaubriand 自身も *Essai sur les révolutions* の第 1 部第 22 章の中で Parny の詩 *Delire* を引用し «*Tibulle de la France*» と呼んで称えているし、*Mémoires d'outre-tombe* の中でも Paris に出て文人と知り合った時、「私は Chevalier de Parny の *élégies* を暗誦することが出来た、そして今でも知っている。」と述べている程であるから興味をそそる点である。

青年 Chateaubriand は人に知られず名もなく淋しい片田舎の森で死ぬことを望んでいる。ここにも彼の特質が見られる。もちろん彼の *l'ennui* から *le dégoût de la vie* を経て *la mort* に至るのは辿るべき当然の道ではあるが、Chateaubriand の作品には必ず死が姿を現す。Atala の死、René における Amélie の死、*Les Natchez* における Chactas, René の死その他 *Outougamiz*, *Celuta*, *Mila* 等の死も含まれる。*Les Martyrs* における *Velleda* の死と *Eudore* と *Simodocée* の殉教死、*Les derniers Abencérages* の *Aben-Hamet* の墓石、*Vie de Rancé* における *Ducesse de Montbazou* と *Rancé* の死等が見られるし、Chateaubriand 自身 *Mémoires* の中でも «J'étais presque mort, quand je vins au jour.» と述べ、額に死の刻印を捺されて、この世に生れて来たかのようなようである。

詩人が自分の回想録にわざわざ *d'outre-tombe* とつけたしたこと自体如何に死(墓)と言う思考が彼につきまどっていたかを端的に現している。1846年の *Avant-propos* 「序文」で彼はそれを説明している。

« Je préfère parler du fond de mon cercueil ; ma narration sera alors accompagnée de ces voix qui ont quelque chose de sacré, parce qu'elles sortent du sépulcre. »

「私は自分の棺の奥から話すことを好む。私の物語りにはだから何かしら神聖なものを持つあの声かともなうであろう。その声は墳墓から出るからである。」

この墳墓から出る声と言う表現は1833年の *Préface testamentaire* にも出てくる。さらにはそれより40年遡のぼり *Essai sur les révolutions* (第2部第16章の注)の中にもイギリス王チャールズ一世の処刑のくだりで同じ表現がみられる。

« Les écrits posthumes nous intéressent ; il semble que ce soit une voix qui s'élève du fond de la tombe. »

Essai sur les révolutions (1797年)はこの *L'Amour de la campagne* に最も近い時期の作品である。従って Chateaubriand と死の問題は切っても切り離せない重要な研究テーマであると言えよう。

* * *

「数々の偉大さのある世にわたしの名は栄光もなく死ぬであろう。」

« Au séjour des grandeurs と言うのは当時の Chateaubriand にとっては文学的先輩、すなわち Bernardin de Saint-Pierre, Delisle de Sales, Ginguéné, Parny, Chamfort, Le Brun, La Harpe, Flins des Oliviers, Fontanes 等の栄光を指しているように感じられもする。*Mémoires d'outre-tombe* の中ではひとり、ふたりを除き彼等を2流、3流として取扱っているが、Chateaubriand がイギリスに亡命中書いた *Essai sur les révolutions* の中では彼等は高く評価されているし、事実 Chateaubriand にとって田舎の片すみで読んでいた詩人や哲人達をまのあたりに見たことは何たる素晴しき驚きであろう。以前は作品を通してのみ遠くからあがめていた彼等が今では自分の前で言葉ゆたかに話してくれる。また姉のおかげで心よく仲間入りさせてもらった時には自分からは到底話しかけることも出来ない程彼等の存在に威圧されていた

のも事実であるから、「私の名は栄光もなく死ぬであろう」と言うように彼等に対して自己を卑下した対象となって読まれているとみることも出来るのではなかろうか。

作品の底に流れているのはか弱さと憂愁、孤独と死であり、それを包んでくれる自然への愛である。これは 18 世紀の Dorat や Bernis¹⁷⁾、Gentil-Bernard¹⁸⁾ や Boufflers¹⁹⁾ のけばけばしい、真面目さの欠けた常に遊びを考えて、つかの間の快楽をたのしむ人為的な詩歌と大いに趣をことにしている。詩の形式においては彼等の影響を受けているが、心情においてまったく異なるのは、青年 Chateaubriand がやがて romantisme の précurseur になる特質をそなえていたからであろう。

しかし、イギリスではすでに Thomson, Ramsay, Young, Hervey, Gray, Macpherson (Ossian) 等が活躍し、sentiment de la nature をテーマにした詩が流行していたし、またフランスでもそれらの翻訳が盛んに出ていた。特に Le Tourneur の訳に負う所が多い。そして Young の「夜」や Gray の「田舎の墓地」や Macpherson の「オシアン」の影響は強く、それらをまねた imitation の詩がフランスでかなり作られた。それは 1780 年代の *Almanach des Muses* を見るだけでも明らかである。

Chateaubriand がアメリカから帰り、イギリスに亡命する以前すなわち Paris で文人達と近づきになった頃彼等のグループから脱落しないために寝る間も惜しんで文学作品を読みあさったことはわかる。従って 8 年余に亘るイギリス亡命中彼がイギリス文学に精通する、それ以前にイギリスの有名な作品を仏訳にせよ読んでいたことも確かであろう。そこでブルターニュ生れのブルトン人特有の ennui を持った彼の心を最も捉えたものがイギリス文学の sentiment de la nature: 自然を愛し、自然の中に育ち、自然に抱かれて生れ、死んで行く情景を唱った詩篇であることも当然であろう。

フランスにおける sentiment de la nature は上述のイギリスの影響を受けて後、次第にかえりみられるようになって来た。夢想を憧れ多分に mélancolique 的であった René が好んで読むフランスの作品もおのずとそう言う傾向のものを選ぶようになるのも理解出来よう。まず J.-J. Rousseau で *Essai sur les révolutions* の中にも «Si j'eusse vécu au temps de Jeans-Jacques, j'aurais voulu devenir son disciple» (「革命試論」第 2 部第 26 章、初版全集の第 II 巻 268 頁) とある程であるから Rousseau に憧れたことは言うまでもない。(特に *Emile* と *Nouvelle Héloïse* に見られる自然描写。) ついで Jacques

Delille²⁰⁾ の名を有名にした *Géorgiques* (1769年) や *Les Jardins* (1780年) も読んだであろう。また Buffon の *Epoque de la nature* (1778年) も Bernardin de Saint-Pierre の *Etudes de la nature* (1784年) (*Paul et Virginie* はこの「自然の研究」の第3版(1788年)の第4巻に掲載され、その後1789年に分けられ出版されている。) また Chevalier de Parny の *élégies* はもちろんのこと、さらには Delisle de Sales の *Philosophie de la nature* にも目を通しているであろう。それに最も親しくなった Fontanes の書きたいいくつかの詩篇等数多く挙げる事が出来る。

さて、この *L'Amour de la campagne* には女性に対する愛は読まれていない。*Tableaux de la nature* の10篇の作品の中でもほとんど女性を対象にしている所はない。ただ第6詩「秋の夜」で1828年に後半35行目以降を追加している箇所に Adèle なる女性の愛と喜びが唱われているが、しかしこの詩も1802年に *Mercur de France* に掲載された時には34行目までで Adèle も出て来ず、秋の夜の美しさだけで終わっている。

Chateaubriand の *sylyphide* (女の空気の精) はたいへん有名である。*Mémoires d'outre-tombe* の第1部第3巻の第9章と第10の両章において彼は現実の女性と激しい想像力から生れる *sylyphide* との交錯を語っている。その箇所にこうした文章がある。

「私は自分を一つの神秘であるとみた。心を悩まされず女性を見ることは出来なかった。女性が私に言葉をかければ、私は真赤になるのであった。誰れに対してもすでに異常な私の臆病さは女性に対しては余りに大きいので、私が女性とたった二人でいる苦しみを味うよりは私の知らない別の苦しみの方がずっとましなように思われた。」(M. O. T. t. I, p. 92)

これは40歳を越えてから書いた文章である。青年期を過ぎた Chateaubriand は死ぬまで女性関係が絶えたことなく、Sainte-Beuve に言わすれば艶福家であったが、青少年時代の彼にとっては確かに女性との接触は母と姉以外なかったと言えよう。

「母や姉の姿がその純粹さそのもので被いながら、私の本性がもち上げようとするペールを厚くしていた。」(同書 p. 92)

美しい近所の人妻と Combourg の大広間の窓際に偶然衝突した時、また Paris に初めて出掛ける時同乗した若い婦人 M^{me} Rosa に対する、とんまな田舎者としての彼の振舞はすべて現実の女性に対する彼の異常な臆病さの現れ

である。従って青春時代の初期詩篇に女性に対する愛が読まれていないのも不思議ではなく、むしろ読まれていないと言うことが Chateaubriand の女性に対する接触のなさと、彼の臆病さが真実であったことを証明していると言える。

この詩篇から 12 年して現れた作品 *René* においては自然に対する愛だけでは人間として満足されない何にかが生れて来ている。Lamartine の *Le lac* は自然と男女の愛の見事な調和であるが、Chateaubriand の *Tableaux de la Nature* はもっぱら自然だけを描き、人間愛の欠けた、言うなれば少年期の殻を脱いでいない、いまだ成熟しきらない作品である。しかしアメリカでのフロリダ娘やイギリス滞在中の Charles Ives 嬢との交りは Chateaubriand をたちまち大人の世界に走らせ、*Atala*, *René*, *Les Natchez* の作品をうませるようになる。

* * *

Génie du Christianisme 以来カトリックの擁護者を自認して来た彼がこれらの詩篇の中ではほとんど神を唱っていないことも注目される点であろう。前にも少し触れたが第 3 のタブロー *Au bord de la mer* の中に出て来る le Dieu にはわざわざ冠詞がつけてある。そこには何とも言えぬ微妙さがうかがえる。青年 Chevalier de Combourg がパリーの文人達と親しくつき合い出した当時のフランスでは 18 世紀の哲学思想が大きく支配していたし、大革命ののろしもあげられた時なのでキリスト教にふれることは彼の思考の中にさえ現れなかったとみられるのではなからうか。やがて *René* の自然描写をみれば到る所に教会の鐘や祈りが姿を見せるように自然を司るキリストの神に戻るのであるが、とにかくこのタブローをはじめ他の詩篇にも宗教は現れず、ひたすら自然への愛で終始している。

色彩感についてはどうかと言うと大体はみどり、青、白、灰色、暗い色等が割合に多く、総じて色彩感覚はまだ発達しているとは思えない。彼の色彩感覚が発達したのは旅行による体験からである。アメリカ大陸の自然、パリーからイエルサレムの旅、その帰りのエジプト、スペインの旅が coloriste としての Chateaubriand を作りあげたので、ブルターニュだけしか知らなかった若き日の René としてはこの *Tableaux de la Nature* に後にみられるようなあてやかな色彩がなくても致し方なかったであろう。*Mémoires d'outre-tombe* の第 1 部第 1 卷第 6 章にみられる有名な *Printemps en Bretagne* に咲く花の見

事さは修練のたまものであろう。しかし描写が余りに豊かになると *ennui* の影がどこかに消えてしまう時もある。その点では *L'Amour de la campagne* の未熟さの方が、かえって *ennui* と調和がとれ、若き詩人の誠実さがうかがえる。

最後にこの短い田園詩でしかも処女作であるタブローの中に Chateaubriand が生涯好んで使用した言葉が溢れる程見られるので列挙してみる。

«prés, bois, ombrage, onde, enchanteresse, fureur, rivage, ennuis, chagrins, dévoré, regrettais, le printemps me rend mes champs et mes beaux jours, verdoyantes, plaines, fontaines, Tibulle, me nourrissant d'amours, fleuve, vallons, suivant tes détours, J'irai seul, gravir, mont paisible, inquiet, sensible, bords, regardant ton cours, j'y veux terminer ma carrière, nuit, tombeaux, mon ombre, tranquille, solitaire, forêts, repos, mourra sans gloire, toits, roseaux, troupeaux, bergers, attendris, berceau, à l'ombre de ces chênes, couché près de cette eau, sous les fleurs, tombe.»

種 (grain) にはすべての要素が含まれている。その grain から芽生えた最初の双葉はやがて散文の世界で開花成長し、大樹となりフランス・ロマン派の長老 Chactas となる。

* * *

«La Forêt»

「森」

Tableaux de la Nature (1828年) の中に第2のタブローとして掲載されているこの作品が最初に発表されたのは、それより26年前の1802年6月26日(革命暦10年 messidor 7日)に *Mercure de France* 誌に Fontanes がある詩人の16歳の時の詩として掲載した時である。

1802年6月と言えば Chateaubriand が33歳ですでに *L'Amour de la campagne* (1790年) とロンドンで発表した *Essai sur les révolutions* (1797年3月) と *Atala* (1801年4月) と *Génie du Christianisme* (1802年4月) を発表した後である。

イギリスに亡命中 Fontanes と Chateaubriand の交友関係が特に親密になり、*Atala* 完成への Fontanes の Chateaubriand に対するはげましと忠告¹⁶⁾

ならびに帰国後 *Génie du Christianisme* 発表の際の Fontanes の援助宣伝は周知のことであるが、何故 *Génie du Christianisme* を発表した 2 ヶ月後にわざわざこの詩を *Mercur de France* に紹介したのかは明らかでない。

Fontanes は 1780 年に *Forêt de Navarre* と言う詩を自分で発表している。森の巨木やその木蔭の心地よさ、また昔時のゴールの森が秘めている神秘性に対する感情を唱っているのが、Chateaubriand から 1785 年代の詩だとして *La Forêt* を見せられた時、Fontanes 自身昔時自分が描いた *Forêt de Navarre* を思い出し、そのなつかしさにひかれて Chateaubriand の作品を紹介したのかも知れない。と言うのも *La Forêt de Navarre* に見られる次の vers を知れば青春時代の二人の心の奥底に内在する思惟の一致を強く感じさせられるからである。もちろん、Fontanes の詩の方が遙かに古典的であることは言うまでもないが。

«Et moi qui, jeune encore, sous leur ombre ai chanté,
Moi-même dans la tombe ils me verront descendre ;
Leurs rameaux élargis s'étendront sur ma cendre,
Et, touchés de ces vers, quelques amants eu deuil
Les rediront peut-être, assis sur mon cercueil.»

しかし、Chateaubriand の 16 歳の作と言え 1785 年であるから、Chateaubriand の作品としては処女作 *L'Amour de la campagne* (21 歳) に先立つものである。

作品 *René* の中に次の文章がある。

«Il n'y rien de plus poétique, dans la fraîcheur de ses passions, qu'un cœur de seize années. Le matin de la vie est comme le matin du jour, plein de pureté, d'images et d'harmonies.» («*René*» p. 187-8)

「16 歳の心ほど情熱の新鮮さにおいて、より詩的なものはない。人生の朝は一日の朝のように清らかさとイメージと調和に満ちている。」(「ルネ」)

16 歳と言え Navarre 連隊に入隊する前の年の René である。Combours の森を姉の Lucile と散歩し、Muse が René の心に姿を現し韻文を作りはじめた時である。*Tableaux de la Nature* の第 1 のタブロー *Invocation* を除けば最初の作品とみられないこともない。だから Chateaubriand も配列の順で初めの方の第 2 のタブローとして置いたのであろう。

1802 年の *La Forêt* と 1828 年のものにおける variantes は句読点に 7 ヶ所、

また文法上単数と複数を明確にするため変えた2ヶ所、その他に用語の相違として次の行がある。すなわち11行目(上が1802年のもの、下が1828年のもの)

Sur un tapis de fleurs, *dans ce lieu solitaire*
 Sur un tapis de fleurs, *sur l'herbe printanière*

17行目

Forêts! *agitez-vous doucement dans les airs*
 Forêts, *dans vos abris, gardez mes vœux offerts!*

19行目

D'autres vous *confieront* des amours étrangères
 D'autres vous *rediront* des amours étrangères

17行目には意味上からも多少の相違がみられる。

「森よ、大気のなかでおだやかに揺れよ」

「森よ、汝の隠れ場にわたしの捧げた願ひを保ってくれ」

が全体の内容に変化をもたらす程のものはないと言える。強いて言えば1802年の作の方が多少簡素である。

この詩は20行の vers からなる alexandrin で、初めの8行は abba=fmmf, cddc=mffm の rimes embrassées で、9行目から12行目までは rimes croisées (fmfm) になり13行目から最後まで8行はまた rimes embrassées になっているから、これも *L'Amour de la campagne* 同様 rimes mêlées と言うことになる。

前にも少し触れたが *Mémoires d'outre-tombe* (T. 1, p. 88) の中に «Je composais une foule de petites idylles ou tableaux de la nature. J'ai écrit longtemps en vers avant d'écrire en prose.» とあるが、Chateaubriand の在世中に M^{me} Récamier の Salon «L'abbay aux boix」で朗読した *Mémoires de ma vie* の第3巻(p. 120)では «Je composais alors la petite pièce sur la forêt: Forêt silencieuse, que l'on trouve dans mes ouvrages. J'ai écrit longtemps en vers avant d'écrire en prose» とあるのを見ても解るように、*Mémoires de ma vie* の manuscrit でははっきり «Forêt silencieuse» とする *La Forêt* の冒頭の言葉まで引用している。

La Forêt

Forêt silencieuse, aimable solitude,

Que j'aime à parcourir votre ombrage ignoré!
 Dans vos sombres détours, en rêvant égaré,
 J'éprouve un sentiment libre d'inquiétude!
 Prestige de mon cœur! je crois voir s'exhaler
 Des arbres, des gazons, une douce tristesse:
 Cette onde que j'entends murmure avec mollesse,
 Et dans le fond des bois semble encor m'appeler.
 Oh! que ne puis-je, heureux, passer ma vie entière
 Ici, loin des humains!—Au bruit de ces ruisseaux,
 Sur un tapis de fleurs, sur l'herbe printanière,
 Qu'ignoré je sommeille à l'ombre des ormeaux!
 Tout parle, tout me plaît sous ces voûtes tranquilles:
 Ces genêts, ornements d'un sauvage réduit,
 Ce chèvrefeuille atteint d'un vent léger qui fuit,
 Balancent tour à tour leurs guirlandes mobiles.
 Forêts, dans vos abris gardez mes vœux offerts!
 A quel amant jamais serez-vous aussi chères?
 D'autres vous rediront des amours étrangères;
 Moi, de vos charmes seuls j'entretiens vos déserts.

(Second Tableau)

森

静かなる森。楽しき孤独、
 何んと僕はお前の知られざる木蔭を歩き廻るのが好きなのか。
 お前の暗い曲りかどをさすらい夢みながら、
 僕は不安から解放された気持を味う。
 僕の心を捉える不思議な魅力、僕は樹々や芝生から
 やさしい悲しみが発散するのを見るような気がする。
 僕が聞くこの流れはやわらかく囁く、
 そして、森の奥でなお僕を呼んでいるように。
 オー、何故僕は、幸せな僕は全生涯を
 人々から遠く離れた此所で過ごすことが出来ないのか?
 この小川のせまらぎに、花のじゅうたんの上で、
 春の草の上で、人に知られない僕はニレの木の
 木蔭でまどろみたい。
 万物すべてが話す。この静かな丸天井のも
 とではすべてが僕には気に入る。
 曠野の佗住いの飾りであるはりえにしだも、
 逃げ去るそよ風に揺れるスイカヅラも

それぞれつるに揺れながらバランスをとっている。
 森よ、お前のかくれ場に僕が捧げた願を保っていてくれ。
 どのような恋人にお前は同じ親しみを見せるのか？
 他の者はお前にまた別の愛を語ろう
 僕はお前の魅力の中から荒れはてた淋しさを抱く。

静かなる森は Combourg の森でも、Plancouët の森でも、Sécardais の森でもいい。とにかく René が青春をすごした Bretagne の森であることには変りがない。森そのものが夢想到に耽ける少年の恋人になっている。森にいただけで、彼の心は落ち着く、そして森を去ることは死ぬ程彼にとって悲しいこともよくわかる。

«J'éprouve un sentiment libre d'inquiétude.»

«Oh! que ne puis-je, heureux, passer ma vie entière.
 Ici, loin des humains!»

この vers と *L'Amour de la campagne* に描かれている次の vers、

«J'y veux terminer ma carrière»

«Il commença sa vie à l'ombre de ces chênes;
 Il la passa couché près de cette eau.»

は若き日の René の同じ心境をもらしている描写である。このように Chateaubriand の死に対する憧れは異常なほどである。*Mémoires d'outre-tombe* の第1部第3巻第14章の *Tentation* で死の誘惑にとらわれ、猟銃で自殺を試みる描写がある。3発弾を込め、庭の奥で銃口を口に入れ、銃の底を地面にうちつけたが不発に終る。そこに庭番がやって来たので運命と思ひ死を思いとどまった、と書いてあるが、初めの二つの詩でも早く自分の生涯を閉じたいと唱っている所を見れば、自殺未遂もあながち作り話ではなく真実かも知れない。*Mémoires de ma vie* (p. 137) の中にも «L'envie de mourir devint chez moi le sentiment dominant» という文章が見られる。

異性に対する愛は *L'Amour de la campagne* 同様この詩にも見られない。作品に透かして見えるのは少年 Chateaubriand のやさしい、pur な心情であり、そこには詩才も充分うかがえる。

«Prestige de mon cœur; je crois voir s'exhaler
 Des arbres, des gazons, une douce tristesse.»

«Ces genêts, ornements d'un sauvage réduit,
Ce chèvrefeuille atteint d'un vent léger qui fuit,
Balancent tour à tour leurs guirlandes mobiles.»

そよ風にゆらりゆらりと揺れるつる草の葉にまで心のひかれる少年詩人こそ、後の *romantiques* の長老にふさわしい *délicatesse* を解する彼であった。やがてこうした詩人の魂の働きは、*Mémoires d'outre-tombe* の中で語られる一本の可憐な花や、あるいは木犀草の匂いを運ぶ微風となり、しかもそれらがフランス帝国の大事件以上の重みをもつ文章となって現れる。

Marcel Proust はこうした描写を Chateaubriand の「回想録」の中に読み「詩人の何たるかをしみじみと感じさせられる。」と感嘆している。

確かに *La Forêt* にせよ *L'Amour de la campagne* にせよ、韻文としては形式においても、内容からしても決して巧みなものではないし、散文詩人として彼の文体が完成された時に見られるあの華麗さと生气、またリズムと感覚がマッチする彼独特の調和と、そこから生れるルリエフと言ったものもない。読む者に詩心があることは感じさせるが、*inspiré* するほどの力には欠けている。しかし、大切なことは汚れなき青少年期の彼が森の木の葉の動きにまで心をとめ、侘びしさを感じる程こよなく森を愛し、森の神秘に抱かれ、森に育てられたと言うことである。

18世紀末の科学万能、革命的思想の急激な発展途上にある時、田園に育った彼は時代遅れで、*sauvage* な、うすのろであったかも知れない、しかしピカピカものを売る宝石商や、けばけばしい衣装で飾りつけるカツラ屋から出たような遊び半分の *inconstance* な *poésies légères* の流行していた時代の空気に染まらず、幼稚ではあるが一筋に自然の絵画描写だけに専念した、気まじめなナイーブな彼の方がやがて *élégie* に生命を吹き込む一歩前進した道程を歩んでいたことになるとも言えよう。

森のとりこである彼はやがてキリスト教に改宗するが、その *Génie du Christianisme* の第3部「美術と文学」の第1巻第8章に *Les églises gothiques* と言うたいへん興味ある文章がみられる。

「森は神 (Divinité) の最初の神殿であった。そして人間は森の中で建築の最初の思考をもった。従ってこの芸術は風土によって変化をしたに違いない。ギリシャ人は棕櫚の手本にならってその葉の柱頭をもって優雅なコリント式円柱を作り上げた。エジプトの古い形式の巨大な柱は大かえでや東洋のいちぢくの木、パナナの木やアフリカの巨大な樹木の大部分を現している。ゴール人の森は同じように我々の

祖先の神殿の中に入った。そして我々の^{シエーヌ}柏の森はその神聖なる起源を保った。葉にほられてあるあの穹窿、壁を支え、急に折れた幹のように終っているあの側柱、円天井の新鮮さ、内陣の暗さ、暗い両翼、ひっそりした通路、低い扉、すべてがゴシック式教会の中に森の迷路が引き直されている。すべてが宗教的恐怖や神性の神秘さをそれで感じさせる。建物の入口に建てられた二つの高い塔は墓地のニレの木やいちいの木を超え、青空に対して絵画的な効果をうみ出している。ある時は明け方の日がその双頭を輝かしているし、ある時は雲で柱頭が飾られたり、もやの大気の中でふとくなくなったように見える。鳥達でさえそれを間違えて、森の樹として用いる。大ガラスはその頂の回りを飛び、その回廊にとどまる。しかし俄かにがやがやした音が塔の頂から飛出し、鳥達を怖がらせて追払う。キリスト教建築は森を建てるだけでは満足せず、いわばそのざわめきも真似しようとした。そしてオルガンと吊した青銅の鐘でゴシック式神殿に森の深みにひびきわたる風の音や雷の音までつけ加えた。²⁰⁾

これを読めば如何に Chateaubriand が森に対してその無限と偉大さと神秘を感じていたかが理解出来よう。それも森を愛する詩人でなければ考えも及ばないこうした着想は卓抜と言う外、言いようがない。また Baudelaire が「悪の華」の傑作 *Correspondance* をうみ出したことに決して無関係ではなからう。

«La Nature est un temple où de vivants piliers
Laisseront parfois sortir de confuses paroles.
L'homme y passe à travers des forêts de symboles
Qui l'observent avec des regards familiers.»

Baudelaire が Chateaubriand を評して «le créateur de la grande école de la Mélancolie» と述べ、Chateaubriand の偉大な特質は «chanter la gloire douloureuse de la mélancolie et de l'ennui.» と言っていること、また彼にとってフランス文学の最も偉大なる師の一人として考えていたこと、「La note éternelle, le style éternel et cosmopolite, Chateaubriand, Alph, Rabbe, Edgar Poe.» を知れば ennui と戦いつづけて創り出した「悪の華」や上述の *Correspondance* の出現もむべなるかなと考えられよう。

最後に Chateaubriand が常用する好きな言葉を *L'Amour de la campagne* の時と同じようにこの作品からも拾い出してみよう。

Forêt, silencieuse, solitude, ombrage, ignoré, sombres détours, rêvant égaré, inquiétude, prestige de mon cœur, sentiment libre, arbres,

gazons, douce tristesse, onde, murmure, mollesse, bois, loin des humains, ruisseaux, tapis de fleurs, herbe, printanière, sommeil, à l'ombre de, ormeaux, voûtes, tranquilles, genêts, ornements, sauvage, chèvrefeuille, vent léger qui fuit, guirlandes mobiles, abris, vœux, charmes, déserts.

ほとんど全部と言ってもよい程である。これらの言葉は *Génie du Christianisme* の中でも *Mémoires d'outre-tombe* の中でも、また 70 歳を超えてからの最後の作品 *Vie de Rancé* においても好んで用いられている所に、東洋的に言う「三つ子の魂百まで」と言う実態を見せられ驚異を感じるのである。要するに Chateaubriand の文章が粉飾するために着飾ったものでなく、生れながらにすなわち彼の grain に備っていたのであると言い得る。Génie de la Bretagne (ブルターニュの精霊) が François René de Chateaubriand に宿っていたと言う方が適切ではなからうか。

¹⁾ *Mémoires d'outre-tombe* 第 1 部第 3 卷第 7 章 *Premier souffle de la muse*, Pléiade 版 T. 1, p. 88.

²⁾ Pourrat 版、第 18 卷、p. 272. これは Jules Janin の編纂による全集で 1836 年から 1839 年に亘って 36 巻本として出版された。

³⁾ Pourrat 版、第 8 卷 *Mélanges littéraires*, p. 27.

⁴⁾ Pourrat 版、第 1 卷第 4 章、p. 84.

⁵⁾ Pons de Verdun (Philippe-Laurent) (1759 年 2 月 15 日 Verdun で生れ 1844 年 5 月 7 日 Paris で死亡)。詩人。Convention には Meuse 選出の議員 (1792 年) となり、ルイ十六世の死刑に賛成投票をする。ナポレオン帝政下には Cour de cassation (破毀院=フランスの最高裁) の弁護士会長となる。王政復古に追放され、1819 年までベルギーから帰国出来なかった。Chateaubriand は M.D.-T. の第 1 部第 9 卷第 16 章 (p. 334) で彼を弑逆へば詩人と呼び、「*Almanach des Muses* が恐怖時代の代理人を出したことは信じられないことである…」と言っている。

⁶⁾ Hoffman(n) (François-Benoit) (1760-1828) Nancy に生れ、詩人、評論家、劇作家。1807 年以来 Geoffroy や Féletz と *Journal de l'Europe* に協力している。Chateaubriand の作品 *Les Martyres* に対する評論を Hoffmann は *Débats* 紙上に発表し激しく攻撃している。

⁷⁾ Delisle de Sales (Jean-Baptiste Isoard; dit) (1743-1816). Chateaubriand より 25 歳年上。M.D.-T. T. 1, p. 136, 137, 383, 439, 1054; Edmond Biré 版の T. 1, p. 218 の注; Monglond: *Le Prérromantisme Français*, T. II, p. 145-147. Chateaubriand は姉の M^{me} de Farcy と Delisle de Sales が交際していたので知り合いになれた。Delisle de Sales は Diderot, Voltaire, J.-J. Rousseau ともつき合っていた。*Philosophie*

de la Nature (1769年初版は4巻本1804年には10巻となる)の著者として知られる。*Histoire des Hommes* 1781年52巻本。*Mémoires en faveur de Dieu* 1802年、凡庸で多作家、百科辞典派の影響を受け「Singe de Diderot」と綽名された。しかし、極端な唯物主義を排し、*athéisme* と戦った。4万部以上の図書を持っていた。Chateaubriandはロンドンから自作 *Essai sur les révolutions* を贈呈している。Lyon に生れ Paris で死亡。

⁸⁾ Flins des Olliviers (Claude-Louis-Marie-Emmanuel, Carbon de) (1757-1806)。Chateaubriandより11歳年上。M.D.-T. T. I, p. 137-138, 291, 488, 1156; T. 2, p. 1143, 1147; *Essai* T. I, XX, XXIII; Sainte-Beuve: *P.L.* II, 218, 231 ChateaubriandはFlinsの紹介によって後の親友 Fontanes と知り合になった。FlinsはChateaubriandの姉 M^me de Farcy に熱をあげていたが、姉の方は問題にしていなかった。Flinsはまた演劇にたいへん夢中であった。午前中は自宅に男女の俳優を迎えて楽しんだ。Reims に生れ Vervins にて死亡、呼び名が長すぎるので特別に Flins とだけ呼ばれていた。凡庸な詩人だったが当時は高く評価されていた。知識欲が強かった。1790年頃から Fontanes に協力して *Modérateur* 紙を創刊した。喜劇 *Réveil d'Epiménide* (1790年)を発表、また *Jeune hôtesse* も1792年に上演。

⁹⁾ Parny (Evariste-Désiré de Forges, Chevalier de) (1753年2月6日 Ile-Bourbon に生れ、1814年12月5日 Paris にて死亡)。Chateaubriandより15歳年上。

1777 *Voyage à l'Ile-Bourbon*

Épître aux insurgents (de Boston) Almanach des Muses

1778 *Poésies érotiques* Livre I. II. III.

1779 *Opuscules poétiques* Amsterdam

1781 *Poésies érotiques, Complètes*

1787 *Chansons madécasses, suivies de Poésies fugitives.* Londres

1797 *Jamsal, anecdote véritable* (en vers) *Décade*

1799 *La guerre des Dieux* (fragments) *Décade*

1795 I-IV. 1795 V. 1799 XIX.

1802 *Isnel et Asléga*, poème en 4 chants. (1808)

1803 *Discours à l'Institut* (1804)

1804 *Goddam*, poème en 4 chants

1805 *Portefeuille volé*=I. *Paradis perdu* II. *Les déguisements de Vénus*
III. *Les galanteries de la Bible*

1806 *Le voyage de Céline*, conte en vers

1807 *Les Roses—Croix*, poème en 12 chants

1808 *Œuvres complètes* 5 vol.

Parny と Chateaubriand の関係は別に論文を予定しているので、ここには Parny の作品名だけを記す。

¹⁰⁾ Ginguéné (Pierre Louis) (1748年8月25日 Rennes に生れ1815年11月16日 Paris にて死亡)。Chateaubriandより20歳年上、M.D.-T. T. I, p. 68, 140-141, 187,

307, 383, 439, 461; T. II, p. 1122, 1143, 1149, 1181. Chateaubriand 同様 Rennes の生れで上流家庭の出、歴史家、詩人、批評家。父は彼に外国文学・言語を学ばせたためイタリア語、英語に秀でていた。文学に進み、初めは Parny にならって *genre érotique* を試みる。*Confession de Zulmé* はその一つである。この作品では盗作事件がおきたが Ginguéné が勝つ。絵画、オペラも大好きであった。*Mercur* や *Journal de Paris* や *Almanach des Muses* に詩や論説を発表したが、La Harpe や Rivarol から辛辣な批判を受けた、大革命の際には熱狂的にそれを迎えた。Ginguéné は Chateaubriand に自分の好きな同僚 Chamfort を紹介している。Chateaubriand はロンドンから自作 *Essai* を彼に送っている。*Lettre sur les Confessions de J.-J. Rousseau* を発表して Rousseau を偉大なる民主主義者として称える。1794年 *Décade philosophique* の編集長となり、同誌上で Chateaubriand の *Génie du Christianisme* を非難している。1802-1806年に Chamfort の作品を4巻本にして発表している。*Histoire littéraire de l'Italie* (1811-1819, 9巻本) は彼の名声をあげた。

¹¹⁾ Le Brun (Ponce Denis Ecouchard) dit Lebrun-Pindare (1729年8月11日 Paris に生れ、1807年8月31日 Paris にて死亡)。Chateaubriand より38歳年上。M.D.-T. T. I, p. 140-141, 870; T. II, 1143; Henri Potez の *L'Élégie en France* 第4章の第3, p. 211-225; Sainte-Beuve の *Lundi*, T.V. p. 107-129, T.X. p. 75, 78. 上記 Ginguéné の友人。異なる *genre* で二人は助け合った。Chateaubriand は Le Brun の詩の凡庸さを述べている。「彼のエレジーは頭から出ている、心から出るのは稀である」とも言っている。しかし「satire に対してだけは才能を見せていた」とも言っている。Sainte-Beuve は Chateaubriand が *Essai sur les révolutions* の中で Le Brun を Pindare を聞くようだとはめているのに M.T.-D. の中では凡庸詩人扱していることを指摘し不満を述べている。

¹²⁾ Chamfort (Sébastien-Roch Nicolas, dit) (1740年—1793年4月13日)。Chateaubriand より27歳年上。M.D.-T. T. I, p. 90, 139-142, 184, 187, 307, 386; T. II, p. 1143; *Essai* の T. I, p. 115 (第1部第24章); Sainte-Beuve: *Lundi*, T. 1, p. 439-440; *œuvres complètes*=édition P.R. Auguis 5巻本。Chateaubriand が知り合ったパリの文人達の中で最も気むずかしい人物が Chamfort であった。Chateaubriand は Ginguéné の家でしばしば Chamfort にあった。*Essai* では Chamfort の *Maximes* を読むことをすすめ、「その思想の深さは我が世紀の最良の作品の一つである。」と激賞しているのにその新版注釈で、Chamfort に対する判断は私のまったくの誤謬であった、と訂正している。M.D.-T. の中でも Chamfort をきびしく批判している。Chamfort の作品には1769年にアカデミ賞を受けた *L'Eloge de Molière* がある。1779年には *Eloge de La Fontaine* を出す。また、悲劇 *Mustapha et Zéangir* は大成功を収めた。*Dictionnaire dramatique* (1776) (Abbé J. de la Porte との共著) も出した。そして1781年にアカデミ会員となる。*Tableaux de la Révolution* (1790-1791) 紙で警句を発表し、革命奉仕の地位として1792年8月19日に国立図書館員に任命される。その頃 Terreur 制度がはじまり、Chamfort はそれと戦う筆は執らなかったが、早くから反対表明をしていた。「La Révolution est comme un chien perdu que personne n'ose arrêter」とか「La fra-

ternité ou la mort》を、彼は《Sois mon frère ou je te tue》としたのは有名な言葉である。そして部下の Tobiasson Duby によって警察に訴えられ、9月に獄舎 Madelonnettes に収容された。一時、獄舎が不健康なので自宅軟禁になったが、部下の Duby の計画を悪企みと誹謗したので、再び Madelonnettes に収容されることになったので、それを嫌って自殺を企てるが失敗した。しかしその時頭に打込んだ弾が摘出されなかったので、それが原因で共和暦 II 年 germinal 24 日に死亡した。親友 Ginguéné は Chamfort から自殺未遂のいきさつを聞きその情景を詳細に語っている。V.-L. Saulnier は *La littérature française du siècle philosophique* (Que sais-je? 版) の中で Chamfort の *Maximes* を高く評価している。そして《S'il avait pu achever son livre de maximes, Chamfort apparaîtrait comme un de nos meilleurs moralistes. C'est, d'évidence, l'un des plus pertinents.》と結んでいる。Chamfort の *Pensées, maximes et anecdotes* は Ginguéné によって 1796 年に出版されている。

¹³⁾ La Harpe (Jean François de) (1739 年 11 月 20 日—1803 年 2 月 11 日、生誕、死亡共に Paris)。Chateaubriand より 29 歳年上。M.D.-T. T. I, p. 138, 141, 143, 184, 187, 307, 383, 388, 389, 453, 473, 488-489, 643, 699, 1163, 1167; T. II, p. 167, 223, 1143, 1147; Sainte-Beuve: *Lundi*, T.V, 103-144; Paul Van Tieghem: *Le Préroman-tisme*, T. II, p. 91, 177, 180, 185, 186, 255, 301; T. III, p. 234, 274-5, 317-8; Robert Sabatier: *La Poésie du 18^e Siècle*, p. 203-206。Chateaubriand は Fontanes の紹介で La Harpe を知る。指で物を食べる行儀の悪い La Harpe は背がとても低かったので悪口屋にはべべと呼ばれていた。しかし当時は万能の評論家、詩人、演劇家で Chateaubriand は彼に夢中になり、姉達と《Lycée》のすべての講義に出席することを欠かさなかったほどで、初期の自作をみてもうためにいつも La Harpe の後をつまわした、と言われている。Voltaire は La Harpe を mon fils と呼び、La Harpe は Voltaire を mon papa と呼んでいたので二人の間柄はよくわかるが、La Harpe の改宗後は Chateaubriand の *Génie du Christianisme* を称え、祝福しているのだからたいへんな変りようである。貧乏貴族の子であったが私生児じゃないかと中傷され激怒し、歴とした貴族だと反駁する。学生時代から優秀であった。人物は堅く大胆であったが余りに背が低いため、autorité であるためには何か欠けていた。詩作 *Héroïde* (1759) が最初の作品である。*Warwich* (1763) も成功した。Voltaire は称えるが Le Brun はひ弱だと評した。色々な *Éloges* を書いて賞を得た。*Éloges de Henri IV* (1770), *de Fénelon* (1771), *de Racine* (1772), *de Catinat* (1773), *de La Fontaine* (1774) 等。1776 年にアカデミ会員に選ばれる。大革命では協力的であったが、疑がわれ、1794 年 4 月投獄される。獄中で *Psaumes*, *Évangile*, *Imitation* を読みカトリックに改宗する。出獄後は Marie-Joseph Chénier と共に政論に加わり、Ecoles Normales でも教授をやった。Récamier 夫人とは長い交際をしていた。彼は今までして来た講義をまとめ 1799 年に *Cours de littérature ancienne et moderne* の発刊準備をする。La Harpe の死後 *Philosophie du XVIII^e Siècle* (1805) と *Mélanges inédits de littérature* (1810) は出版された。彼の予言者的作品 *Prophétie de Cazotte* は死後出版されたが、創作の点からも文体からも傑作とみなされている。La Harpe の埋葬に出席した Chateaubriand はその情景を描いている。Fontanes 氏が

その弔辞を読み、「雪が舞い風が棺を被っている黒衣をまき上げ、死者の耳に友情の最後の言葉を聞かせている。」と述べている。

¹⁴⁾ Fontanes (Jean Pierre Louis Marquis de) (1757年3月6日 Niort で生れ、1821年3月17日 Paris で死亡)。Chateaubriand より11歳年上。M.T.-D. T. I, p. 88, 138, 143, 184, 230, 307, 388, 389-397, 401, 429, 438-439, 443-444, 448-452, 458, 467, 489, 492, 520-521, 525, 527, 535-537, 587, 601, 629, 632, 634, 636-637, 659-660, 855, 943, 1060, 1069, 1121, 1132, 1156, 1163-65, 1167-69, 1171-73, 1175, 1183, 1189, 1210; T. II, p. 42, 76, 156, 193, 222, 248, 254, 256, 287, 810-811, 985, 1083, 1123, 1143, 1145, 1447-51, 1154-77, 1160. Sainte-Beuve: *P.L.*, p. 207-305; Aileen Wilson: *Fontanes* (1928年 Editeur: E. de Boccard); H. Potez: *L'Élégie en France* p. 331-332. M.D.-T. の引用を見てもわかるごとく、Chateaubriand と最も親しかった先輩指導者。Paris の文人社交界で知り合った時よりも英国に亡命中 Londres での付き合いで親交を結んだ。それ以来 Fontanes が死ぬまで Chateaubriand は Fontanes に忠誠を示し、1839年に Chateaubriand は Fontanes の作品を集め2巻本として Hachette から出版させている。Fontanes は Brumaire 以前に英国よりフランスに帰り身をかくしていたが、Bonaparte が Directoire を倒して以来姿を現し、Bonaparte に手紙を書き近づく。*Eloge de Washington* で Bonaparte に手腕を買われ急速に出世し、Sorbonne の総長になり文部大臣にもなる。Chateaubriand の *Génie du Christianisme* の宣伝に Fontanes が活躍したことは余りに有名である。Chateaubriand は *Essai sur les révolutions* の中で Fontanes を Simonide にたとえている。H. Potez は Fontanes の作品にすでに新しい時代に通じるものがあつたと認めている。Chateaubriand と Fontanes にはもう一人哲学者文人 Joseph Joubert (1754-1824) がいたことを忘れてはならない。

¹⁵⁾ Panat (le chevalier de) (1762-1834)。M.D.-T. T. 1, p. 385, 400-401, 1164; Sainte-Beuve: *P.L.*, II, p. 248. Chateaubriand より6歳年上。Panat は海軍に入り、1814年には海軍少将になっている。1789年当時 Paris で Chateaubriand を知り、その後英国亡命中にも再会している。Panat は Chateaubriand の *Génie du Christianisme* を読んで感激し、Chateaubriand に新しい時代の精神の指導者として称え、名文の書翰を送っている。

Chateaubriand が Bretagne の田舎から Paris に出て来た時には確かに他の文人が皆偉大に見え、彼は小さな魚にすぎなかった。しかし晩年になった時にはちょうど Paul Klee の「黄金の魚」のように中央に君臨し、かつての文人達は小さくなり、四散し消えてしまうようになる。Chateaubriand が *Mémoires d'outre-tombe* の中でかつての文人達を厳しく批判していることに対し、Sainte-Beuve は恩義を忘れていないと非難しているが、現代からみて Chateaubriand の批判が如何に正しいかを知れば Chateaubriand の炯眼に驚くのみである。また Chateaubriand が Fontanes や Joubert に対して終生その恩義を忘れていないことをみれば Sainte-Beuve の指摘の方が歪んでいると言えないこともなからう。

¹⁶⁾ Dorat (Claude-Joseph) (1734年12月31日 Paris で生れ、1780年4月19日 Paris で死亡)。Chateaubriand より34歳年上。M.D.-T. T. I, p. 389; *Poésies diverses*

の p. 8; *Génie du Christianisme* T. II, p. 116 (Pourrat 版); Saute-Beuve: *Lundi*, T. V, p. 110, 112, 127; T. X, p. 450-452; T. XI, p. 52, 511; T. XV, 287; *P.L.*, T. II, 212, 215; Alexandre Piedagnel: *Œuvres choisis de J. Dorat* (1888 年); Robert Sabatier: *La Poésie du 18^e Siècle*, p. 86, 111-112, 126, 142, 173, 196, 198, 202, 207, 208, 210, 211, 222. Dorat は最初、王の近衛兵として軍隊入りするが、叔母の願いで 1758 年に辞め、文学界に入り、詩集 *Fantaisie* (1758) を発表する。ついで演劇にひかれ 1760 年 1 月悲劇 *Zulica* を上演したが 7 回でおろされる。第 2 の劇 *Théagène* は失敗。そこで当時流行していた短詩に目を向け、自分の茶化す才能を大いに駆使して、*Épître de Racine à Corneille* (c. 1765), *Avis aux sages du Siècle* (1766) を発表する。しかしそれがもて *Voltaire* や *Ferney* と不仲になる。そして当時の哲学者達を離れる。アカデミ会員にもなれない。1765 年頃から死ぬまで多くの genres にわたる詩集を多作するが余り秀でたものはない。1773 年の *Fables* はよくまとまっているが尊敬していた *La Fontaine* には遠く及ばない。演劇技術の知識と法則を示した *Essai sur la Déclamation théâtrale* (*La tragédie, la comédie, l'opera, la danse* の 4 つの歌からなる) は佳作とみられている。宴会に招かれ、気のきいた作詩をして人に喜ばれる *élégant* な詩人であるが、芸術への誠実さと仕事に対する苦悩を常に欠いているので大詩人にはなれなかった。また彼自身、大詩人になることなぞ望んでいなかった。1770 年 5 月に発表された詩 *Les Baisers* が Dorat の作品としては一番有名であり、世人に若き時代の甘い夢を思い起させてくれるが、やはり *passion* から生れたものでなく、18 世紀末の *Poésie légère* の代表作で、*Boufflers* ほど度ぎつくないが芸術作品としては消える運命を辿る。

¹⁷⁾ Bernis (François-Joachim de Pierre de) (1715 年 5 月 22 日 Saint-Marcel に生れ、1794 年 11 月 1 日 Rome で死亡)。Chateaubriand とは直接関係はない。詩人、政治家。M.D.-T. T. 1, p. 448, 1174, 1175; T. II, 41; *Etudes historiques*, V, 最終章 p. 447; Robert Sabatier: *La Pésie du 18^e Siècle*, p. 79, 87-89, 126, 142, 195, 208; René Jasinski: *Histoire de la littérature française*, T. II, p. 87-88. Bernis は cadet の資格で聖職につくように宗教教育を受けたが、若い時は元氣潑刺、つやつやして人形のように可愛くて、しかもしとやかで才気があったので M^me de Pompadour の寵愛をうけ、abbé になったが軽やかな詩が上手なため、29 歳でアカデミ会員に選ばれた。そしてさらに M^me de Pompadour のおかげで、1753 年には Venise の大使に任ぜられ、3 年そこですごし、1756 年帰国すると國務次官に任命され、1757 年には外務大臣になると言う栄達ぶりであった。1758 年には枢機卿に任ぜられた。しかしその後 M^me de Pompadour と不和になり追い出されたが、数年後復活し 1769 年にはローマ大使になり 1791 年まで精動した。そしてローマで死んだ。若い時に女性に喜ばれる軽い歌 *Les Saisons* を作ったので、*Voltaire* は Bernis のことを «Babet la bouquetière» (花売娘のパベ) と呼んだ。Bernis は当時 Fontenelle や Buffon とも交際していた。枢機卿になってからは、うかれた詩も作っていられなかったので *Voltaire* 宛の書翰で «J'ai renoncé à la poésie, parce que j'ai reconnu que je ne pouvais être supérieur dans un genre qui n'admet pas de médiocrité» と書き送っている。*Voltaire* との correspondance (1799 年発刊) には 2 人の才気が輝き満ち溢れている。1795 年には 10 の歌からなる詩集 *La Religion*

Vengée も発刊されている。「L'esprit est à la beauté ce que la rosée du matin est aux fleurs.」と述べている如く、Bernis は esprit をこよなく愛した poésie fugitive の詩人である。Chateaubriand は「歴史研究」の中で l'abbé de Bernis のことを «né de ses chansons et fils de ses vers si profondément oubliés.» と書いている。的確な批判である。Chateaubriand は *Génie du Christianisme* を発表して一躍有名になり、ローマ大使館参事官に任ぜられ、1803年ローマに赴いた時にはすでに Bernis 大使は死亡していて、その遺体は Saint-Louis-des-François に収められた。Chateaubriand の恋人 Pauline de Beaumont は胸の病が不治であることを知り、ローマに駐在する愛人に抱かれて死ぬことを願い、哲人 Joubert がとめるのも聞かず出掛け、半月たらず共にすごして Pauline は死に、Cardinal de Bernis と同じ Saint-Louis-des-François 寺院の堂内に安置された。

¹⁸⁾ Gentil-Bernard (Pierre-Joseph Bernard) (1710年8月26日 Grenoble に生れ、1775年11月1日 Paris 近くの Choisy-le-Roi で死亡). Robert Sabatier: *La Poésie du 18^e Siècle*, p. 78-79, 103, 178, 270; René Jasinski: *Histoire de la littérature française*, T. II, 87. 彫刻家の子として生れ Lyon で教育を受け、色々な職業につき名をあげようとした。duc de Coigny の保護を得てから軍人としても詩人としても地位を確保する。Bernard が初期に作った詩を Voltaire が読んで詩人を Gentil と呼んだ、それから彼は常に Gentil-Bernard と呼ばれるようになったが、同時代の仲間の証言によると、およそ gentil な所などは彼の容姿にも態度にも精神にもなかった、と言われている。優雅な詩を作る点で Gentil と呼ばれたことを重視しなければいけない。Gentil-Bernard も M^{me} de Pompadour と親交があった。多くの aventures galantes を持ち、成功している。そして征服した相手女性のリストも発表している。Anacréon de la France と呼ばれもした。*Art d'aimer* 「恋愛術」なる詩も書いている。poésies légères の作者であるから、amour platonique とか amour précieux とはおよそかけ離れた詩を作り、人の心を voluptueuse な image であやしくすさぶる詩人である。彼の初期の作品 1737年に上演されたオペラ *Castor et Pollux* の音楽構成は Rameau によってなされた。

¹⁹⁾ Boufflers (Stanislas, marquis de) (1738年5月31日 Nancy に生れ、1815年1月18日 Paris に死亡). Robert Sabatier: *La Poésie du 18^e Siècle*; René Jasinski: *Histoire de la Littérature française* T. II, p. 90, 100; *Poésies et pièces fugitives diverses de M. le chevalier de Boufflers*. Chez Desenne, Paris. 1782. Stanislas 王が代父となり、Stanislas と言う名をもらい、Lunéville 宮廷で美人の母のもとで成長した。最初は聖職をはげむため Saint-Sulpice 修院に入ったが、2年しか続かなかった。そこで作った物語 *Aline de Golconde* は、彼が書いたものとしては最も美しいものと言われる。聖職に適さず軍隊の方が向いているので、chevalier de Malte になり戦争に向向く。会戦で活躍し将官となり、1784年に軍隊を辞す。才能ありしかも élégant で galant な彼は、軽い色々な genre の詩を作る。1785年に Sénégal 政府を手に入れ、その職責をはたし、土着人をなずかせた。しかし都会人の彼は、長くフランスを離れていることは出来ず 1788年に帰国、その後すぐアカデミー会員となる。大革命に亡命し、1800年に帰国し Napoléon に協力し帝政下には Salon に老人として姿をみせたが、昔時のような人気はな

かった。作詩の外に旅行記や興味ある書翰も残した。Jean-Jacques Rousseau は彼を評して「Il a beaucoup de demi-talents en tout genre.」と決めつけているが、心情に重きを置く文人ならば誰れでも Rousseau と同じ批判を下すであろう。Dorat, Bernis, Gentil-Bernard, Chaulieu, Bouffiers 等 *poésies légères* の詩人達は女性を遊ぶ相手としか考えない、それも閨房でのたわむれに力を注ぎ *poésies érotiques* を作って得意になり公表する。その点で Duclos や Crébillon fils の romans と軌を一にしている。合理主義・科学主義・物質主義が17世紀末の円熟を過ぎ腐敗して来た土壤に根を上げ開花した18世紀文学の一面である。多くは消えてしまった作家達であるために、いささか長い注をつけてみた。

²⁰⁾ Delille (Jacques) (1738年6月22日 Aigueperse に生れ1813年5月1日 Paris で死亡、国葬)。Chateaubriand より30歳年上。18世紀後半の詩人。M.D.-T. T. I, p. 142, 386-387, 401, 652-653, 659, 690, 840, 1189, 1194; T. II, p. 1147, 1150; Sante-Beuve: *P.L.*, T. II, p. 67-103; Paul Albert: *La littérature française au 18^e Siècle*, p. 59-73; Robert Sabatier: *La Poésie du 18^e Siècle*, P. 124-132. 1769年にVirgileの *Géorgiques* の訳を出し名声をあげる、その頃 *collège de France* で詩の講義もする。1774年(36歳)にアカデミ会員となる。その後 Saint-Séverin の僧院で聖職を受け、abbé のタイトルを得る。恐怖政治下に捕えられるが、Chaumette に保護され *L'Être suprême* 祭りのために詩を作る。Delille は thermidor 9日の後スイスを経てドイツに亡命する。家政婦と親しくなり、やがて妻として迎え共に亡命する、ドイツ、英国に亡命し *Consulat* 時代に帰って来て、再び *Collège de France* で教える。半身不随となり、盲目になり、妻に助けられ仕事をする。多くの *poèmes didactiques* を作る。1780年に *Les Jardins*, 1800年に *L'homme des champs*, 1802年 *Dithyrambe sur l'immortalité*, 1803年 *La Pitié*, 1806年に *L'Imagination*, *Les trois règnes de la nature*, *La Conversation* (1812) 等。Miltonの「失樂園」(1805)の訳も出している。彼の作品は思想が浅く、émotion に欠けていたので、次の世代のロマン主義にたちまちうち消されてしまったが、偽古典の作詩が盛んであった当時はたいへんな賞賛を受けた。Chénier や Hugo も彼に負う所が多い、と言われている。Chateaubriand は *Mémoires d'outre-tombe* の中で「abbé Delille の傑作は *Géorgiques* の翻訳である。感情は欠けているが、まるでルイ十五世時代の言葉に訳された Racine を読んでいるようだ」と言っている。また「Mignard によって見事に描写された Raphaël の絵画である。」とも言っている。要するに真物と模倣の相違をはっきり指摘しているのである。偉大な詩人が不在の時には、えてして作家は style のみに心をそそぎそれが詩だと思ふ時には *genre descriptif* が生れるのである。

²¹⁾ Avant de risquer l'ouvrage au grand jour, je le montrai à M. de Fontanes: il en avait déjà lu des fragments en manuscrit à Londres. Quand il fut arrivé au discours du père Aubry, au bord du lit de mort d'Atala, il me dit brusquement d'une voix rude: «Ce n'est pas cela; c'est mauvais; refaites cela!» Je me retirai désolé; je ne me sentais pas capable de mieux faire. Je voulais jeter le tout au feu; je passai depuis huit heures jusqu'à onze heures du soir dans mon entresol, assis devant ma table, le front appuyé sur le dos de mes mains étendues et ouver-

tes sur mon papier. J'en voulais à Fontanes; je m'en voulais; je n'essayais pas même d'écrire, tant je désespérais de moi. Vers minuit, la voix de mes tourterelles m'arriva, adoucie par l'éloignement et rendue plus plaintive par la prison où je les tenais renfermées: l'inspiration me revint; je traçai de suite le discours du missionnaire, sans une seule interligne, sans en rayer un seul mot, tel qu'il est resté et tel qu'il existe aujourd'hui. Le cœur palpitant, je le portai le matin à Fontanes, qui s'écria: «C'est cela! c'est cela! je vous l'avais bien dit, que vous feriez mieux!»

²²⁾ Les forêts ont été les premiers temples de la Divinité, et les hommes ont pris dans les forêts la première idée de l'architecture. Cet art a donc dû varier selon les climats. Les Grecs ont tourné l'élégante colonne corinthienne avec son chapiteau de feuilles sur le modèle du palmier. Les énormes piliers du vieux style égyptien représentent le sycomore, le figuier oriental, le bananier et la plupart des arbres gigantesques de l'Afrique et de l'Asie.

Les forêts des Gaules ont passé à leur tour dans les temples de nos pères, et nos bois de chênes ont ainsi maintenu leur origine sacrée. Ces voûtes ciselées en feuillages, ces jambages qui appuient les murs et finissent brusquement comme des troncs brisés, la fraîcheur des voûtes, les ténèbres du sanctuaire, les ailes obscures, les passages secrets, les portes abaissées, tout retrace les labyrinthes des bois dans l'église gothique, tout en fait sentir la religieuse horreur, les mystères et la divinité. Les deux tours hautaines plantées à l'entrée de l'édifice surmontent les ormes et les ifs du cimetière et font un effet pittoresque sur l'azur du ciel. Tantôt le jour naissant illumine leurs têtes jumelles; tantôt elles paroissent couronnées d'un chapiteau de nuages ou grossies dans une atmosphère vaporeuse. Les oiseaux eux-mêmes semblent s'y méprendre et les adopter pour les arbres de leurs forêts: des corneilles voltigent autour de leurs faites et se perchent sur leurs galeries. Mais tout à coup des rumeurs confuses s'échappent de la cime de ces tours et en chassent les oiseaux effrayés. L'architecte chrétien, non content de bâtir des forêts, à voulu, pour ainsi dire, en imiter les murmures, et au moyen de l'orgue et du bronze suspendu il a attaché au temple gothique jusqu'au bruit des vents et des tonnerres, qui roulent dans la profondeur des bois.